

OTANIing

大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!

新入生を代表して「宣誓」



初心に樹つ

学校長 飯山 等

入学して間もない4月の、まさに「新しく入る」と言うに相応しい時期に、新入生歓迎会を中高共に持つことができました。感染の状況が好転しない中でさまざまなことに気を遣いながらでしたが、実施できたことを嬉しく思います。私は高校の会は初めの少しの時間しか観られませんでした。中学は皆さんと一緒に楽しむことができました。会は生徒会の人々が制作してくれた施設紹介のビデオ、そして各クラブ員によるクラブ紹介が続きました。どのクラブも新しい部員の勧誘に熱が入ります。会のリーフレットに「初心者歓迎!」の大きな文字が躍っていたこと、「初心者歓迎です」の呼びかけの音が今も心に残っています。入学は、人を初心に立たせてくれる。始める私に、初心の人になる、なれるということなのだとあらためて感じました。初々しくある、新たに始める。別の角度からそのことを言えば、それはできない私に立つこと。できない私を、私と認めること、受け入れることです。

今年3月、グローバルクラスのⅣ・Ⅴ年生が、この2年の間は感染症のために実施できなかったカリフォルニア大学のデビス校での研修をようやくにして実現することができました。私は参加の皆さんの日々の記録を読ませてもらって、学びが失ってはいけない原点、初心をあらためて教えられました。そして、そのことを可能とする、できない私がそのままにして認められる安心、それがあからこそ、できない私を自身が安心して受け入れられるのだということ、そこからうまれる学びの喜びが、私を伸びやかに成長させてくれるのだということ胸に刻んでおきたいと思ったことです。

私たちは学びの経験が身に纏いつかせて、背負ってしまった負の意識、わからないこと、できないことは恥ずかしいという意識に捕らわれてしまっています。「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」という古訓の罪深さを思わずにはいられません。尋ねることを臆する、わからないままに済ます。その臆する心を打破すべく掲げられる古訓なのかもしれませんが、いつきの訊くと、訊かぬ一生の二つは、どちらも恥の領域内のこととしてあります。そのことが学びを萎縮さ

せてしまっている。そしてその反動として、できること、わかることが自身を驕慢にさせている。この古訓を是として受け取っている不明を突きつけられた思いです。「一時」と「一生」でその是非を判じて、そこに共通してある「恥ずかしい」という感情をそのままにしている。その評価をもったままなされる、「恥」を根柢に抱えた「訊く=ask」は、いのちの歩み・成長を萎縮させてしまうと痛く感せずにはいられませんでした。

1カ月の留学が教えてくれたのは、「学ぶことはこんなにも楽しいことなのか」ということです。わからないこと、できない自分が、大きな安心の中に感じられる。その感動は自身のこれまでを見直し、これからを考える、全人的なものとなったのです。その喜びを日記から強く感じることができました。道具としての英語(デビスに行く前はそう感じていた)の上達ではなく、もちろんそのことは皆が願っていますが、それを超えて、デビスの日々は濃密で豊かなものとなりました。人に出会い、触れあう喜び、通じ合う喜び、通じ合いたいとの意欲。誰もが深い感動をもってその喜びを日記に記しています。私は、皆が齊しく「学びが楽しい」と書いているのに触れて、考えてみれば、そこにこそ学ぶこと、生きることの原点があるはずなのに、いつのまにか重い荷物を背負って歩むようなものと化してしまっている現実のなかに、自らを追いやっている私たち。私たちの「学び」を、「聞く」ということを、内からも、外からも、変質・劣化させて、閉鎖的なものにしてしまい、いのちの歩み、成長を萎縮させ、ついには途上にあるまま止めてしまっている。

知らないこと、できないことは、私を現在に閉ざす障碍ではありません。私の未来を開く出発点です。稚い(いとけない)幼児がまさにそうであるように。私たちはいつからできないこと、まちがうこと、知らないことを、評価の目でしか見られなくなったのでしょうか。願わくば、大谷での学びが、皆さんのこれからの学びを、さらには生きることを、安心と喜びに満ちた、revitalizeないとなみであることを、そして、個を超え、クラス・学年の垣根を超え、生徒と教職員という枠を超えて、広く力強く拡がっていくことをと念ぜずにはいられません。